

日本看護倫理学会誌 第10巻記念鼎談

日本看護倫理学会誌の過去、現在、そして未来

日本看護倫理学会誌は今号で10巻を迎えました。これもひとえに会員のみなさまのご支援の賜物と厚く感謝申し上げます。編集委員会では刊行から10年という節目にあたり、小西恵美子編集委員会初代委員長と坂田三允現委員長、そして、田中高政初代および現副委員長の鼎談を企画しました。学会のコアな部分を占める学会誌というプロダクトを一から作り上げた開拓者達のphilosophyを、看護倫理に関わるすべての方たちと本企画で共有することは、今後の看護倫理の発展に必ず役に立つのではないかと考えます。そこで、日本における看護倫理のその時々「いま」を実践および学問という切り口で広く社会に発信し続けてきた日本看護倫理学会誌の編集に携わる者からみた、日本看護倫理学会誌と、日本における看護倫理の過去と未来について語って頂きました。

〈語り手〉

日本看護倫理学会編集委員会

小西恵美子 初代委員長 (鹿児島大学医学部)

坂田三允 2代目委員長 (多摩あおば病院)

田中高政 初代および2代目副委員長 (前佐久大学看護学部)

〈聞き手〉

日本看護倫理学会編集委員会

大出順 編集委員 (帝京大学福岡医療技術学部)

〈学会誌創刊時の想い〉

大出：では、鼎談をはじめさせていただきます。まずはじめに、学会誌の立ち上げはどのように進んだのでしょうか。

小西：アン J. デービス先生 (長野県看護大学名誉教授) の助言が大きかったです。査読も、編集のポリシーも、全て倫理なのだよと。Nursing Ethics誌の例も大変参考になりました。

大出：創刊初期の編集委員長としての想いというものはあったのでしょうか。

小西：投稿区分にレターを是非入れたかった。レターは今も生き続けていて国内の学会誌ではユニークですし、とくに我々は倫理の学会ですし。

田中：やっぱり看護倫理学会は現場や臨床あつての学会だと思っているので、研究者だけの論文だけを掲載するのではなくて臨床の方々の実践も掲載したい想いから、このレターという投稿区分をつくりました。臨床での実践が学会誌という場で記録に残るし、論文にすると質感が大きく変わってしまうような臨床家としての自分の気持ちを

書ける唯一の場所として、レターはすごく大事だと思います。

小西：それから日本の学術雑誌では「原著論文」という区分がありますが、海外では一律に「アーティクル」とするなど、区分はなくて皆同列なものが多い。原著論文とは一体、何だろうと改めて考えました。原著に過大な価値をおくことも疑問で、最初は投稿区分から「原著論文」を外していました。でも査読者は「この論文は原著ではなく資料としてなら掲載できますね」とか、従来の論文カテゴリーの目での査読が多かった。いったんは原著の区分をなくしてみましたが、日本で長く定着してきたものも大事にしようと、1-2年で「原著論文」のカテゴリーを復活しました。

田中：そうですね。

小西：この件で学んだことは、海外のモデルが日本にフィットするとは限らないなということ。はじめの頃は社会実験みたいなことやらせてもらったという感じですね。チャレンジしてみました。

〈査読の手引きのなりたち〉

大出：実際に投稿を募集しはじめてからのエピソードはありますか？

小西：最初は論文投稿の締め切り日を決めていなかった。だから、そろそろ原稿は来るかな、来るかなと、びくびくしていたら4月の早々に投稿してくださった方がいてうれしかったです。

田中：創刊当時は、査読者から「こんな論文を読ませるなんて時間の無駄だ」という意見を頂いたこ

ともありました。

小西：いたね、怒っちゃう査読者。Nursing Ethics誌の査読の手引きをみると「論文の査読は相手を教え導くようにやりなさい」ということを書いてある。親切にと。要するに、倫理原則で言えば、Do goodという気持ちでやりなさいと。ところがこちらの査読者はそうではない人もいて、怒っちゃう。こんな論文を読ませるなどか。こういうことがあって、私たちで査読者の手引きをつくりました。

田中：査読の手引きを作ったのは3巻からでした。査読の手引きを作ることで、査読者を育てるといった取り組みもしてきました。

小西：倫理的じゃない査読だってできてしまう。これを出されたらうちの会社がつぶれるなんていうような感じの論文はボツにするとか、そういう恣意的なものが入ってはいけない。「こんな論文を読ませるな」という人は、裏を返せばその人自身が査読の倫理をご存知ないのかもしれない。査読者は「自分はなんでも知っている学者」と思ってしまいがちだからこそ、Do goodが大事。そうやって著者のレベルをアップする、教育する、査読ではそれが大事とアン先生も強調されていました。

〈学会誌の先駆的な取り組み〉

大出：過去には面白いコンテンツもありました。4巻では査読のプロセスを全部掲載しているものがありました。

小西：ああいう試みをやってもいいのでは、とやってみました。

田中：査読の結果「掲載不可」となった論文を査読プロセスとともに掲載しました。

小西：この論文は査読コメントが素晴らしかった。しかし、掲載不可になってしまうと、査読も日の目を見ない。こんな素晴らしい査読なのに、著者と査読者の1対1だけの出来事になってしまうのはもったいないと、まずそう思いました。これはユニークなコンテンツでした。

田中：これは、他の看護の学会の雑誌ではなかなかみないコンテンツですよ。

〈学会誌と看護倫理学のこれから〉

大出：創刊当時から今までのことについてお話し頂きましたが、学会誌や看護倫理学について、これから先はどのようにお考えですか。

小西：日本の看護系学会では、ちょっと変なところにエネルギーを使い過ぎるというような気がするのが心配。例えば、査読をする時に内容よりも、倫理審査を受けたかとか、ツールの開発者



の許諾を得たかとか、そんなところばかりをみる人がいる。それこそmoral blindnessで、ルールに従っているかという目でみて、内容をみない。もちろん、出典明記などは著者の最低限の義務。でも、とかく形にこだわるのは、まだ未成熟のように思う。

坂田：そう思います。ある程度のルールを作らないと何が書かれているか分からないので、せめて形を整えて書きましようみたいなところから入っていくんだと思うんですね。

小西：研究倫理は元々何のためかといえば、「相手を傷つけない」ことが重要なことで、形ではない。確かに国が出した新しい倫理指針はかなり細くなっている。お上がダメと決めているものは世に出せないわけだからしょうがないけれども、お上が倫理指針の対象外だよとせっかく言っているのに、それぞれの機関が「いやいや(倫理審査が)要る」などというのは、そこまでやらなくてもいいのになと思ったりします。このままだと日本の研究は自滅しちゃうのではない？研究倫理の締め付けで。

大出：私も全く同感です。しかし、形というか基準がないと困る場面もあります。複数の査読者が関わる査読プロセスでは、投稿論文の質を一定に保つことを考えるととにかくしらの基準は必要かなと感じますが。

小西：伝統的に医師がやるような研究では「generalizability (一般化可能性)」を重視するよね。看護もそうなっているけれども。アメリカでは2004年ごろからData-driven practice improve-

mentという、少ないサンプル数からでも evidenceをつくり、使って、それを伝えるという研究が実践的な研究として位置づけられているんです。日本のように、サンプルが少ないからリサーチじゃないとか、業務改善は研究じゃないとかとやられると、せっかくの取り組みや結果が日の目を見ない。だから、そういうものを査読する基準、査読とか投稿手引、それをアメリカの実践的な雑誌から少し取り入れたらどうかと思います。だんだんと「研究や論文はこうあるべき」という空気をわれわれが率先して変えていくといいと思うんですよね。

坂田：年次大会では研究発表と実践報告というのをすでに分けていますしね。

小西：我々の学会誌でも率先してやって、様子が分かってきたら自分たちで査読基準なんかを作ってみるなりして、何かそういう基準を作って、あとは回していくとかね。だんだんと。

大出：新しい取り組みといえば、近年は電子ジャーナルが増えてきているように感じます。

小西：増えてきてるよね。でも電子ジャーナルになると読まないね。

坂田：確かに。

田中：読まないですね。編集委員もそうだし、書いた人たちも自分の論文が載った雑誌が手元に届くのがうれしいんですよ。

小西：見開きでぱっと見られるのがいいよね。1度にぱっと目に入るというだけでも、いいなと思うね。だから看護倫理学会誌ぐらいいはせめて、め

ちゃくちゃ厚くはならないだろうし、冊子でやっていてもらいたいなんて思うね。古風な学会のまま続けてもいいんだよ。

小西：日本看護倫理学会ができたのは、いろいろな学会で倫理のセッションがどんどん縮小していく趨勢(すうせい)をみたのがきっかけでした。看護系の名だたる学会ですら倫理の枠がどんどん減っていったのね。だから今、この学会や雑誌があってよかったと思います。看護倫理学会があるから倫理の話が聞けるし、学会誌に載っているこの先生に話を聞いてみようとか。

坂田：そうですね。

小西：看護だけではなくてもこの学問の存在意義はとも大事だと思いますよ。看護倫理はとても大事。他の倫理系の学会などに流されてはいけなしいし迎合してはいけない。看護でなければディスカッションできない問題もあるわけだから。

田中：本当にそういうのにぎわう学会誌、現場の人たちの現場のいろんな出来事を情報交換するツールになればいいですね。

小西：本当ね。

大出：では、そういうところを目指しながら今後は頑張っていきたいなと、すごく思いました。まずは考えて行動を起こすのが大事ですね。今日は貴重なお話、ありがとうございました。

〈編集〉

日本看護倫理学会編集委員会

中村充浩 編集委員(東京有明医療大学)